

長野県「脱ダム宣言」の 行方を探る

移動第2分科会

田嶋季晴（長野県住民と自治研究所）

この現地分科会は大変ぜいたくな学習会だった。ダム問題では第一人者の天野さん、現地案内説明役の内山、小林、山岸の三氏は「長野県治水・利水ダム等検討委員会」浅川部会の公募委員であり、当初からこの問題に関わってきた「生き字引」のメンバーであった。現地長野からは、高齢協の小沢房夫、田嶋季晴の二名が加わった。

当日（10月31日）の日程は、8時45分長野駅東口集合、9時出発。午前中に浅川を、千曲川との合流点から源流付近まで見学。見学ポイントは、合流点にある樋門（千曲川の増水時に千曲川本川から浅川への逆流防止用）付近と浅川改修がよく分かる通称眼鏡橋と呼ばれる地点、「浅川ダム」建設予定地点、浅川の源流付近の4か所。昼食休憩の後、午後は報告と天野さんの講演と質疑討論というものだった。

1. 午前の部

浅川・千曲川合流点へ

まず浅川と千曲川の合流点へ向かう。本日の講師、案内役などの紹介の後、早速内山さんの案内が始まる。走っているバスと浅川・千曲川との位置関係から20年近く前に発生した地附山の地滑り災害や1847年に起こった「善光寺大地震」のことまで尽きることがない。鳥居川大橋の近くにバスを止めて、眼

下にさらさらと流れる鳥居川を見ながら10分ほど歩いて浅川の樋門と排水機場に向かう。ほとんど勾配のない浅川は流れがわからない。千曲川の堤防を歩きながら、つい一週間ほど前の台風23号の際には、堤防のすぐ下の所まで増水したと、増水の後を示しながら説明があった。遙か上流の方には1kmに及ぶ小布施橋が臨まれる。広い川幅をいっぱいにして流れる千曲川の姿が参加者の脳裏によみがえったであろうか。

ここで、内山さんから、浅川の堤防は千曲川の堤防よりも5m低くなっていることが説明された。洪水の際、千曲川が増水してくると浅川への逆流が起こるので、その段階で浅川の樋門が閉められ、その後は排水機場からの千曲川への排水にたよるほかない。現在の排水能力は、最大で44トン/秒でその能力を超える水は湛水することになる。仮に浅川の



- コーディネーター 田嶋季晴 (長野県住民と自治研究所)
- 講演 天野礼子 (脱ダムネットジャパン)
- 現地案内・コメンテーター 内山卓郎 (ルポライター)
- 小林重夫 (飯綱・浅川を守る連絡会議事務局長)
- 山岸堅磐 (信州の教育と自治研究所)

上流部にダムを造り、その水が放流されれば、浅川下流部の湛水による内水災害は拡大されるという矛盾が起こることが説明された。

内水災害こそ問題

浅川ダム計画によれば、100年確率の洪水による千曲川との合流点での最大流量(基本高水*)450トン/秒のうち、100トン/秒をダムでカットして、350トン/秒が合流点に流入することになっている。因みに、田中県政以前の県土木部の資料や説明では、上流にダムさえ造れば残りの水はすべて千曲川に流れることになっていた。過去に苦い災害の体験を持つ沿線住民は、30年間このように思いこまされてきた。ダム信仰は未だに根強く残っている。

浅川の改修が八割方終わり、天井川の主要部分が解消された現在、浅川からの溢水は無くなっている。問題は下流部の内水である。さらに、浅川の合流点から1kmほど下ったところの立ヶ花から千曲川の狭窄部がしばらく続くので、この辺りが遊水池の役割を担っているという説明もあった。

*基本高水とは、治水計画で防御対象とする洪水規模を流量の時間変化(ハイドログラフという)で表現したもの

過大な基本高水が問題

時間がないため、一通りの見学と説明にとどめ、不足の部分は移動中のバスの中で続けられた。浅川に設定されている基本高水は過去の洪水時の降雨量を参考にしながら引きのばしを行っており、実態を無視した過大な値になっている。ダム計画を正当化するためであるが、仮にダムを造り、一定の湛水を行ったとしてもそれは浅川の内水対策にならないばかりか、逆効果になってしまう。洪水時には、浅川の水は千曲川の水位が上昇する前に速やかに千曲川に流すのが合理的である。その時期にダムに湛水して、すでに樋門が閉められた後ダムからの放水があると、内水災害はますますひどくなってしまふ。

眼鏡橋付近

次は、通称「眼鏡橋」と呼ばれている典型的な天井川だったところ。天井川の下を信越線が走っていた場所である。天井川のすぐ横には長野と湯田中を結ぶ長野電鉄が走っていた。改修前の浅川はこんな高いところを走っていたのか、と驚きの声が挙がる場所である。現在の浅川との落差は11m近い。記念のためにと要望もあり、この天井川の跡は残されたものである。つい先日の台風による大雨の時も、浅川はさらさらと流れていて何の不安もなかったというすぐ近くの住人の話もある。

る。

浅川ダム建設予定地

三番目は、問題の「浅川ダム」建設予定地。移動中のバスでは、内山さんの説明が続く。バスが予定地のある山間に入ると、まず巨大な構造物 ループ橋にさしかかる。この辺りから既に地滑り地帯になっている。浅川右岸沿いには急峻なブランド薬師山がそそり立っており、多くの巨岩が露出している。風化作用に弱い裾花凝灰岩であり、96年2月、北海道古平町の豊浜トンネル坑口で発生した岩石崩壊事故(犠牲者20人)と同じ岩質であるとのこと。ループ橋はカーブでその直下を縫って走っている。



前代未聞の付け替え道路

この道路は、1998年2月の「長野冬季オリンピック」に間に合うように浅川ダムの付け替え道路として造られた。付け替え道路の計画を先に決め、後からダム建設地点を設定するという前代未聞のことがなされたという話である。

ダム予定地は地滑り地のど真ん中

バスはいよいよダム建設予定地の真上にある広場(ダム工事に造られた)に到着。ここからは、ダム軸の標示やダムの湛水線などの標示がよく見える。遙か下流の方には、長野県企業局が造成して売り出した数千戸の住宅団地が広がっている。

ダム建設予定地決定のいきさつについては、前述のように取り付け道路のルートを先に決めたため、地盤の悪い場所を二転三転、四転五転し、結局いったんあきらめたはずの古い候補地点へ逆戻りしたということである。その上、湛水線のすぐ上には、地滑り防

止のための集水井が四基も設定されている。片方で水抜きをしながら、すぐ下に多量の水を溜めるダム建設というおかしなことがまかり通ろうとした。すべては、五輪道路を優先したところに発したことでであると内山さんは強調された。

この予定地は、1985年(昭和60年)7月に発生した地附山大崩落(特養老人ホームの入所者26人が生き埋め)はダム予定地から1.6km、1847年に起きた善光寺大地震の震央は1.53kmという問題の場所であるとのこと。

内山さんの案内はここで終わり、バスは浅川の水源地、飯綱の湖沼地に向かう。

浅川の源流・水源地

ここからの案内役は元長野市職員的小林重夫氏。小林さんは、長野市の農業委員会で仕事をした経験もあり、「飯綱・浅川を守る連絡会議」の事務局長としてはじめから奮闘してきた。飯綱・浅川の自然環境に明るい。

バスを降りて、五つの湖沼群の一つ「猫又

池」の堤まで歩く。池の水は、堤の改修準備のためかほとんど抜かれて水たまり程度。景観上は残念であった。以下は小林さんの説明。

五つの湖沼はいずれも浅川下流に広がる水田（現在は宅地に変わったものが多い）の用水確保のため、古いものでは戦国時代に造られたものもある。「猫又池」が一番新しく、戦時中の昭和14年（1939年）から17年頃までかかって築かれ、最も大きい。

この辺り一帯は、長い年月を重ねて湖と雑木林が飯縄山を背景に素晴らしい景観をつくっていた。湖沼群の奥の方には、「逆谷地湿原」があり、京浜急行（株）がゴルフ場建設のために調査したところ、この湿原の泥炭層は深さが12mもあることが分かった。日本で最も古い湿原であろう。私たちは、長野市に残されたこの飯綱東山麓の貴重な自然環境と水を守り、災害防止のため1992年1月に長野県に対して公害調停を申請、92年3月から95年5月まで3年あまりにわたって調停を続けたが不調に終わり、京浜急行はゴルフ場建設を始めた。その後、ゴルフ場建設差し止めの訴訟を起こし、ゴルフ場の営業開始後は、「営業停止、現状回復」へと請求の趣旨を変更して訴訟を続けたが、2003年3月「原告の請求棄却」の判決が下され、敗訴になってしまった。最後まで主張し争ったのがこの「猫又池」の安全性の確保だった。今立っているこの堤（堤防）が老朽化して下部からの漏水も確認されていると主張して、裁判官による現地検証まで行われた。京浜急行側は否定したが、その後長野市による調査も行われて堤防を改修することになっている。

万一、湛水時に大雨や地震などが起こり堤防が決壊するような事態になれば、大災害が発生することは必至である。公害調停は不調

に終わり、裁判では敗訴したが、ゴルフ場は当初の27ホールが18ホールに縮小され、「猫又池」の堤防の改修の目処が立ったのは貴重な成果と言えるだろう。

2. 午後の部

午後は山岸堅磐さんの報告から始めた。報告の概要は全国集会の資料集（165～167頁）に譲り、本稿では要点の紹介にとどめたい。

浅川ダム阻止住民運動と「脱ダム宣言」

1980年代末、長野県や長野市は「長野冬季オリンピック」の招致に熱を入れていた。この動きに連動して、京浜急行の「飯綱ゴルフ場」開発計画が浮上し、「浅川ダム」は県土木部による調査が進められていた。89年1月に“ふるさとの山飯綱・浅川を考える市民シンポジウム”を開いたところ、予想を上回る100人あまりの参加者があり、この問題への市民の関心の強さが分かった。このシンポをきっかけに、「飯綱・浅川を守る連絡会議」が結成された。ゴルフ場については前述の経過を辿ったが、「浅川ダム」については、その後「浅川ダム建設阻止協議会」に引き継がれ、10年のたたかいの中で、四度、ダム本体着工を阻止してきた。この間私たちは、住民に呼びかけて現地調査を行い、専門家や研究者の話を聞き、ダム建設予定地が地滑り地のど真ん中であること、第四期断層があること等を学んだ。

田中知事の誕生で劇的なダム中止へ

田中知事は、就任後まもなくの12月末に、県の光家土木部長以下の担当官の案内で、浅川の千曲川合流点・排水機場から始めて、ダム建設予定地、ブランド薬師山の頂上付近にある帯状の凹地まで踏査して、その晩に開か

れた関係住民集会に出席、賛成反対相互の論議を聴いた末、その場で、「浅川ダム」建設の一時中止を宣言した。これは、長年積み重ねられてきた住民運動の成果でもあった。

「脱ダム宣言」

「...縦しんば、河川改修費用がダム建設より多額になろうとも、100年、200年先の我々の子孫に残す資産としての河川・湖沼の価値を重視したい。長期的な視点に立てば、日本の背骨に位置し、数多の水源を擁する長野県に於いては出来る限り、コンクリートのダムを造るべきではない。...」

脱ダム宣言は多くの県民に大きな感動を与え、全国的にも賛同と多大な反響を呼び起こした。

2002年6月8日、「脱ダムネットワーク(2001年5月、36団体で結成)1周年県民集会」を600人規模で開催した。記念講演で新潟大学大熊教授は、「ダムは環境破壊、堆砂など副作用の多い劇薬である。安易に造るべきではない」と発言された。

ダムなし総合治水の開始とダム派の巻き返し

情報公開と住民参加で、ダムによらない総合治水が進められているが、浅川の場合、基本高水が千曲川への流入口で450トン/秒と設定されており、田中知事はダムなしを掲げながらも対策に苦慮している。「河道内遊水池」として県土木部が提案しているものは、まぎれもないダムであり論外である。長野市の鷺沢市長をはじめ、県議会のダム推進派は、この基本高水を楯に巻き返しを図っている。基本高水の見直しが焦点である。

先日の台風23号の際には、24時間雨量が124ミリと過去最高となり、基本高水の検証が行われることが期待されている。

最後に天野礼子講師の講演が行われた。1時間余にわたる講演だったので、ここでは要点と思われることに絞って報告としたい。

3. 天野礼子講師の話から

ヨーロッパの治水と河川政策を学ぶ

2000年6月の衆議院議員選挙の翌日から三週間ほど、ヨーロッパの治水と河川政策、公共事業政策を現地で学んできました。学んだことの一つは、ヨーロッパでは財政が許さないでダムなど無駄な自然破壊をする公共事業は出来なくなっていること。もう一つは、財政が苦しい中でも、自然再生をすることにお金を回しているということです。ダムをやめ、一方ではそのお金を一生懸命自然再生に増しているというのがヨーロッパの現状です。

帰国後、三人の政治家にその話をしました。鳩山由紀夫さんと菅直人さん、三人目は亀井静香さんです。

政治家の反応

鳩山さんは、すぐに「公共事業を国民の手に取り戻す委員会」をつくりました。菅さんは「そうか。」と聞いていました。

亀井さんには、よけいなことを一つだけ話しました。「...21世紀に、もしも亀井さんが総理になりたいと思ったら、ダムを造る、道路を造るという時代ではもうないんですよ。ヨーロッパでは、自然再生に少ないけれども金を回している。これからは、福祉とか人々のニーズに合うものにお金を充てていくという時代なんだ。」と。すると、一ヶ月後の2000年9月に亀井さんが「公共事業の抜本見直し検討会」というのをつくったので、日本中がびっくりしました。二ヶ月前の選挙に時に

は、「...公共事業のどこが悪い。公共事業の分配は富の分配である。」と言っていたんですから。

また、私が委員をしていた民主党の委員会は、この年の11月1日に「緑のダム構想」を発表しました。そして翌年2001年2月20日に発表されたのが、田中知事の「脱ダム宣言」です。

新潟の水害、ダムで水防の知恵を失う

新潟の水害地にも大熊先生と二度行きました。約20人の被災者住民の方々に話を聞いたのですが、昔は年に一回水防訓練をやり、洪水の際の対策と知恵を学んできた、ダムが出来て堤防が丈夫になり、以前は人が住んでいなかったところに住宅が建ち、入居したのはみんな若い人たちになったので水防の知恵と技を失ってしまったと。全国どこでも同じなんです。

ヨーロッパや米国に学び河川行政の転換を

2002年にドイツを中心に大きな水害が起きました。ドイツでは100人が死亡、ロシア、黒海沿岸では55人の死者を出し、オーストリアやチェコ共和国では数十万人の被害を出しました。ドイツの関係5省庁による河川会議は次のような発表を行いました。『川に沿ってあまりにも多くの構造物が造られていたので、水害を起こさずに洪水を受け入れる余地が無くなってしまっていた。これまで造られてきた洪水を防ぐというすべての構造物が、そこから下流における洪水の危険性を高めてきた。人が住んでいない地域に洪水を受け入れるための“遊水池”を川に取り戻すために、国家は努力しなければならない。』このあと、EUもほとんど同じ結論を出しています。

1983年には、アメリカのミシシッピ川・ミズーリ川でも2002年のヨーロッパと同様な洪水が起こっていて、大水害となりました。当時、アメリカの治水を担当していた陸軍工兵隊は、これまで採ってきた工法 川をまっすぐにし、丈夫な堤防を造る の過ちを認め、国民に謝りました。

わが国の河川管理者が今夏の水害から学ばなければならないのは、この欧米の官僚達のとった『反省』の姿勢なんです。日本の国は狭くて、欧米のように遊水池政策を使うことは出来ないと言っていますが、それはうそです。国土交通省という巨大官庁と農水省が一緒になったら遊水池なんてすぐ出来るんです。減反田を全部川のそばに集め、今そこに人が住んでいれば補償を払えばいいんです。つまらないダムを何百基も造る費用を考えれば、そこにいる人に堤防に少しだけ遠いところに移っていただくことは、お茶の子さいさいで出来ることなんです。

田中さんの「脱ダム宣言」は素晴らしいものでした。内山さんがさっき言っていましたけど「脱ダム宣言」は田中さんにしかできなかった。私もそう思います。でも、「脱ダム宣言」を出したところで個性的な田中はもういいんです。次は全国に総合治水を要求する田



中さんであってほしいと思います。全国の知事が総合治水を言っても、それでも政府がやらなければ、みなさんが政権交代をさせて、共産党や社民党や民主党を羽交い締めにして、憲法改悪はさせない、「緑のダム構想」をやっていきなさいと言わなくてはいけない。私たちが羽交い締めにする力が強ければ強いほど政党は21世紀型になり、弱ければ自民党と同じような政党をまたつくるだけです。

もう一つだけ、「脱ダム宣言」の説明をしておきます。「長期的な視点に立てば、日本の背骨に位置し、数多の水源を擁する長野県に於いては、出来うるかぎりコンクリートのダムを造るべきではない。」この短文には、ものすごく重要なことが書かれているんです。みなさんが見ている飯綱高原や日本アルプスは日本の背骨です。今年も地震がありました。こんなに地震で揺られる国にコンクリートのダムを造ったら、山から出てくる砂がダムにたまるのは当たり前なんです。天竜川には、この30年以上の間にたくさんのダムが出来ましたが、ダムにたまった砂が海に届かないので、1000mも海岸が後退しています。また、大井川では約300mも海岸が無くなっています。

脱ダムではなくダム撤去の時代へ

なぜ撤去なのか、全国集会資料集の私の項(163頁)の「森から川、川から海へのつらなりを取りもどそう」を読んでいただいたらご理解いただけだと思います。

国というものは、官僚が変わるのを待っているのではなくて、自分自身で変えていくものだと思っています。今日みなさんと一緒に勉強して、またひとつ賢くなったかな、と喜んでいます。

参加者の感想

- ・なぜ浅川ダムを中止したかったのが、熱い思いが伝わってきました。ダム建設は国や行政の頭の良い人たちが考えてやる事だから間違いないと思ってきましたが、素人考えでも無理とか当たり前だとか思うことが、平然とばかばかしく行われているのが現状ですね。私も川の近くに住んでいます。最近の雨の降り方は半端ではないので、台風の時など心配します。ダムの代わりになる代替案が早く考えられると良いと思います。
- ・先の台風で我が家の前の川があふれ、濁流が家に入るのを土のうでかろうじてくい止め、土石流危険流域とのことで、一晩自主避難し、怖い思いをしました。全国各地に集中的な大雨が災害をもたらしたことという時こそ、皆で治水への合意づくりをすすめていくことが重要と思いました。美しい紅葉を見ることができたのもよかったです。
- ・マスコミ等の情報により「脱ダム宣言」は聞いていましたが、今日、本当の意味を理解する事ができました。現場を見て、天野さんの生の話を聞かせて貰って、長野の現状をよく知らない者にもよくわかりました。「百聞は一見にしかず」がよかったと思います。
- ・無謀なダム構想がまことしやかに進められていく、現代社会の危機を感じました。住民の力量、住民自身の統治能力を高める重要性を痛感しました。
- ・水害から人間の生活を守るはずのダムの建

設。しかし、実は人間の都合で水害が起こり得る可能性があるということに気付かされた。「権力はうそばかり」「自治の不自由」との発言が耳に残り、とても勉強になりました。

- ・ダムの問題も原発の問題も、一般の市民には真実はまだまだ届いていないこと、自然と共生できる別の生き方が選択肢としてたくさんあるということを感じます。

